

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 37-2

通号 第 97 号

ACANTHUS : BULLETIN OF SAITAMA MUNICIPAL URAWA MUSEUM

平成20年度特別展関連文化講座の概要

平成20年12月7日(日)に特別展「100年前のさいたま―まちと師範学校―」に関連した文化講座を開催しました。講座では、「100年前の浦和とその周辺」というテーマで、元浦和市史編集委員青木義脩先生に講演していただきましたので、ここにその概要を紹介します。

みなさんこんにちは。今ご紹介をいただきました青木義脩です。私は浦和の教育委員会に長くいて浦和市史の編さんにも携わったので、広く浅い話になります。今日のお話は100年前の浦和とその周辺ということで、どこまでがお話の境目というわけではありません。「王子さまがやって来たとき、お城もそこに働く人も王さまお妃さまそして美しい15歳のお姫さまも台所の火まで皆100年前のまま眠っていたのです。』『ねむりひめ』あるいはグリムの原典のままだと『いばらひめ』の話です。100年前がそっくりそのまま残っていたらどのようでしょうか？100年前の浦和とその周辺をいきなり覗いて見ることにしてみましょう。そしてそこから何が得られ、それが将来、どう役に立っていくか、短い時間ですが考えてみましょう。

〈まずは石井桃子さん〉 文学から入った今日のお話、何ととっても100年前、正しくは101年前、児童文学者石井桃子さんは浦和町に生まれました、今の常盤町の中山道の端です。この春101歳で亡くなりました。『熊のプーさん』は最初の翻訳です。昭和56年(1981)には『幼ものがたり』を著わしていますが、まさに今日の話のような浦和が描かれています。「私の



講座風景

家は、中仙道に面していて、昔の浦和宿の北のはずれにあった。母屋は麦わら屋根の大きな家で、私の祖父はそこで金物屋を営んだ。』『幼ものがたり』の一節です。100年前ぴったりと云ってもあまりにも偶然性のお話で、そういうにわか知識比べのごとき話は来年になれば無価値ですので、そういうことではなく、1世紀ほど前の浦和とその周辺の歴史事象は私たちに何を教えてくれるのか、それを語りたいと思います。

〈サッカー100年〉 燃える、サポーターが燃える、だからと言ってもいいほど、浦和レッドダイヤモンズは飛躍しました。日本一になりました。アジアで一番にもなりました。浦和はサッカーの街です。そのサッカーの歴史を紐解くと、埼玉県師範学校に細木志朗教諭が見えられ、サッカーの指導をしたのが始まりです。その場所は、今のさいたま市役所です。それを記念して、市役所の前にヘディングをやっているブロンズ像があります。そこに埼玉県師範学校がありました。戦後埼玉大学教育学部になったので

目次

平成20年度特別展関連文化講座の概要	1
文化講座アンケート集計結果	3
行事カレンダー・日誌抄	4



す。まさに100年前のことです。これは偶然でなく、このことから今日のこの講座が計画されたのです。

なおついでですが、その8年前の明治33年(1900)に師範学校は、今の埼玉会館の地から今のさいたま市役所の地に移ってきました。埼玉会館の地にあった建物は、鳳翔閣です。鳳翔閣という名前は、鳳が空を翔けるような建物ということで、三条実美が名前をつけました。浦和博物館に、鳳翔閣、当時の師範学校の玄関上に掲げられていた、三条実美の筆跡の大変大きな額が飾ってあり、まだ金も残っています。直筆は埼玉大学にあります。その後ここに浦和高等女学校が誕生し、続いて埼玉県女子師範学校が出来たわけです。高等女学校は、明治43年(1910)には岸町の新校舎に移転しており、さらに女子師範学校は今の付属中学校の地に移り、鳳翔閣は後ろに曳かれ県立図書館となりました。その前面に大正15年(1926)、今の一代前の埼玉会館が出来ました。

〈浦和画家 魁^{さきがけ}〉 師範学校と言えば100年前、一人の絵の先生がいました。その名は、福原霞外で、さいたま市最初の油彩画家です。別所沼を描いた霞外の油絵が現存しています。この会場で回顧展をやったこともあります。そして彼の素描は100点以上も大切に保存されています。霞外は、画家を目指し小山正太郎の不同舎に学びましたが、画業を断念し、ヨーロッパ留学も諦め、教師の道に入り、明治33年には埼玉県師範学校教諭になりました。以後浦和に住み12年間その職にありました。その教えぶりは、「病の身にあるを知らざるものに似たり」というくらい情熱的でした。関東大震災を経て浦和は画家の町に向かいます。鎌倉文士に浦和画家となるわけです。

〈画家と言えば、田中保〉 岩槻旧藩士の子として岩槻に生まれた田中保は浦和中学校に学び明治37年(1904)浦中卒業後渡米し、働きながら画を学び、アメリカ人の美術評論家と結婚し、パリに移りました。2度と祖国の土を踏むことはなかったですが、「裸婦のタナカ」で通じる作品を多く残し、昭和16年にパリで亡くなっています。その芸術的評価は高く、ようやく日本でも知られるようになりました。作品の多くは、県立近代美術館に収集されています。妻から送られてきた遺髪は岩槻区の芳林寺に葬られました。

〈近代漫画の祖北沢楽天〉 北沢楽天は、大宮宿の紀州徳川家鷹場鳥見役の家の生まれ、その先祖は近世大宮宿の基礎を作った人で、さらに古くは、岩付城主太田資正の子で寿能城主となった潮田出羽守資忠の家臣でした。楽天は明治38年(1905)『東京パック』を主筆創刊しました。それまでポンチ絵などと言われた漫画を確立させた人です。いま盆栽町に漫画会館があります。あそこが楽天の旧居です。北沢楽天は近代漫画の祖と言われます。

〈紅赤110年〉 明治31年(1898)、当時の針ヶ谷村(今の北浦和)の山田いちは、突然変異から紅赤種さつま芋発見、これを親類筋の吉岡三喜蔵が普及、たちまち我が国のサツマイモの主流を占めるようになりました。この方が立派なのは、常に研究熱心であったことはもちろんですが、名誉や見返りを考えず、普及に惜しみない努力をしたことです。昭和6年(1931)財団法人富民協会から栄えある富民賞を女性では最初に受賞しました。いま廓信寺の前に説明板が立っています。紅赤発見100年記念に有志の会の方々によって建てられたものです。

〈電灯会社〉 浦和に火力発電所があったのです。今の県庁の北東、県民健康センターの下、見沼土地改良区があったところ、裏門通りの右側で、今は空き地ですね。明治37年7月、埼玉電燈株式会社ができ、浦和に初めて電灯がともったのです。ガスによる火力発電所です。大宮は明治40年に川越電気鉄道によって供給されました。さらに岩槻は、岩槻電気軌道株式会社によって大正3年に送電開始となりました。粕壁に火力発電所がありました。

〈街の景観〉 浦和地方裁判所(明治26年・今の常盤公園)、日赤埼玉支社社屋(明治38年・今の県民健康センター)、浦和高等女学校校舎(明治43年)、武徳殿(明治45年)、物産陳列館(大正元年)、埼玉県議会議事堂(大正2年)、これらは、先ほど鳳翔閣のお話をしましたが、いずれもランドマーク的な建物でした。また優れた建物でした。100年をまたぐもの、100年になんなんとするものです。これらの建物は、浦和の地から姿を消しました。かろうじて、日赤社屋が嵐山町に移築保存されているに過ぎません。その生き残りもどんどん消えています。公共建築は規模が大きいだけに建設も解体も大胆です。今でこそ、箱ものはもっとも批判されやすい公共事業です。しかしそのひとつ前は、どれだけ発展してきたか、という夢の実現でした。なるほど伸びゆく埼玉の意味が分かってきました。

〈荒川水害と治水〉 県議員であった飯田新田の斎藤祐美は、明治39年(1906)、県議会で「荒川放水路開鑿ノ件」を訴えました。隅田川に沿って荒川放水路を建設し治水、利水を図ろうとしたものですが、当時はまだ機が熟さず、関心を呼ばなかったようです。そうした中、明治40年、43年の大水害が起きます。これを機会に利根川治水会と荒川治水会が合体さらに東京埼玉連合治水会となり、荒川の管理は国土交通省に引き継がれています。東京に向かう電車で赤羽の鉄橋あたりを左に見ると、今は使われていませんが、荒川水門が見えます。改めて荒川放水路なしに今の東京の北の水からの守りはできません。

〈武州鉄道〉 幻の鉄道とされる武州鉄道、今地下



鉄の岩槻延伸を思うとき、これまた惜しまれる結末でした。大門、野田、岩槻、蓮田を結んでいた、武州鉄道の計画はかなり早いのですが、実現までは紆余曲折が多く相当の時間がかかりました。「中央軽便電気鉄道会社」の名ではじめ、「中央鉄道株式会社」となり、動力は電気から蒸気へ変わりました。明治41年、それこそ100年前に申請書が出され、川口、鳩ヶ谷、安行、大門、岩槻、春岡村宮ヶ谷塔の路線で明治43年免許となりました。計画変更を重ね、第1期として川口・岩槻間、第2期として岩槻・菖蒲・加須・忍の路線が決定しました。第1次世界大戦、川口の地価高騰、銀行の対応などありまた沈滞、ようやく蓮田・岩槻間6.4kmが大正13年開通、岩槻・武州大門間7.8kmは昭和3年開通、武州大門・神根間2.7kmは昭和11年に開通しましたが、資金難、蕨に延伸できなかったこと、武州銀行の対応、鉄道省の指導〈施設改善〉などに対応できず、解散総会が昭和13年に開かれました。もし、生き残っていたら、大門、野田、さらに岩槻の地理的位置は異なっていたでしょう。武州鉄道以降、野田や大門あたりはその跡で掘割ができ、切通になっていました。それが国道122号線のバイパスになり、東北自動車道が乗っかるようになっていきます。

〈まとめ〉 いくつか100年まえ前後のことを話しました。一つ一つはつながりがないかもしれませんが、今のさいたま市が目指しているもの、抱えている問題、その下地や宿命、そして100年前に理想としたこと、それが少し見えてきました。

サッカーであり画家であり、文学であり、災害に対する真剣な取り組み、鉄道であり、一方で、ランドマーク的なものがはっきりしない状況から、さいたま新都心の整備などでようやく巨大都市らしくなってきたわけです。箱物は、力を合わせて優れた文化を作る、ひとつの手段です。しかし箱物は文化のすべてではありません。常に「未来に向かって夢を見続ける」ことが文化です。その際に忘れてはいけないこと、それは「歴史と伝統の上に未来の文化がある」のだということです。これを忘れると、足場がなく、自分がどこに立っているのかははっきりしないことになってしまいます。過去にかかずにいては未来は望めないという人がいますが、それは、間違いで、やはり、古の人たちがどう考え、どう努力してきたか、それが出発点であるということです。伸びゆくさいたまのためにはビルド・アンド・スクラップも必要です。しかし、顧みることのない未来志向は、同じ過ちを繰り返します。外交では「歴史認識」という言葉が示されます。また、「未来志向」という言葉も出てきます。「未来志向」という言葉で「歴史認識」を等閑視していいか、それは違います。反省すべき歴史は反省しなければなりません。蓋をすれば同じことを繰り返します。100年は反省にも継承にも手ごろな長さかもしれません。終わります。

文化講座アンケート集計表

受講者の講座に対する要望及び講座運営などに関する意見を把握するため、一昨年からアンケートを実施し、今回が3回目です。当日の受講者は、111人で、地域別では、市内106人、市外5人、県外0人でした。市内では旧浦和市が多く83人、内訳は浦和区41人、南区17人、緑区16人、桜区9人です。理由として、テーマが直接浦和に関係しているためと思われる。昨年に比べ出席者が11人増でしたが、特に浦和区では昨年より23人増でした。アンケートの回収数は32枚、回収率83パーセント、昨年の回収率は85パーセントなので、昨年同様有効回答数と考えて良いと思います。設問の選択肢の後の数字はパーセントです。

1、今回の講座はどのようにして知りましたか。

1) 市報 27.0 2) ホームページ 0.0 3) 公民館・図書館の掲示 12.0 4) 講座開催案内のはがき 40.0 5) 浦和博物館に来館したとき 9.0 6) その他 12.0 講座開催の情報源別による受講者の設問5の満足度は、5)の来館したときと6)のその他が100パーセントで最も高く、ついで4)のはがきが95パーセントで1)市報が82パーセントで最も低かった。全体的にはどういう動機であれ満足度が高かったと思われませんが、動機による満足度の差は、講座に対する期待度の違いなのかもしれません。

2、時間配分はどうでしたか。

1) 長すぎる 0.0 2) 少し長い 4.4 3) ちょうどよい 81.0 4) 短い 12.4 5) 短すぎる 1.1 6) その他 1.1 時間配分については、今回の3)ちょうどよいの割合が昨年に比べ6.2ポイント減少していますが、昨年同様大半を占めていますので、妥当な時間と思われる。

3、内容について。

1) 難しすぎる 0.0 2) わかりにくい 4.8 3) よくわかった 72.6 4) 少しやさしい 13.1 5) やさしすぎる 1.2 6) その他 8.3 3)のよくわかったが7割以上を占めているので、内容的には受講者に受け入れられたと思われる。

4、参加の動機は。

1) 題名に興味があった 50.4 2) 講師に興味があった 19.9 3) 文化講座によく参加するから 13.8 4) 博物館の講座だから 13.0 5) 人に誘われて 4.1 6) その他 0.8 昨年に比べ1)が11.7ポイント増だが、浦和区の参加者の増加と併せ考えると地域の人の関心のある講座だということになります。また、2)が昨年より7.5ポイント増加したことは、講師の知名度が高く、選定も適切だったと思われる。また、参加の動機別による設問5の満足度では1)題名、2)講師のそれぞれの受講者の満足度がそれぞれ90パーセントを越えました。

5、講座全体について。

1) とても満足した 25.0 2) まあまあ満足した 37.0 3) 普通 27.1 4) 不満 5.4 5) とても不満 2.2 6) その他 3.3 1)と2)は、講座に対して満足度の高い受講者であり、それらの合計が6割以上になり、3)を合計すれば約9割の受講者が満足したことになり、講座自体の評価としては成功といえると思います。

6、今回のテーマとして、希望するものがございましたらお書きください。

受講者の多くが参加の動機として題名を挙げていることから、地域の歴史に関連したテーマ等が多いのは当然かもしれない。具体的には、中山道、武蔵武士、中世・江戸時代の浦和宿、時代的には考古、中世、近世など幅広い。これらのことは、昨年と同様な傾向と思われる。

そのほか、ご意見、ご感想等がございましたら、ご自由にお書きください。

声小さい、聞き取りにくい、映像や地図がほしかった、レジメの字が小さいとの指摘及び内容的には、市を理解するのに参考になった、資料が良かった等がありました。



行事カレンダー (平成21年4月～平成21年9月の予定)

開館時間 9時～16時30分

☆常設展

会期 4月16日(木)から7月7日(火)まで
内容 当博物館の所蔵品による展示

7月26日(日) クイズ大会
8月1日(土)から8月30日(日) 文化財さがし
8月8日(土)・9日(日) 見沼通船堀のしくみ

☆親子探鳥会

会期 6月13日(土)
内容 小学生以上の親子が対象で、見沼田んぼで野鳥を観察する。

☆常設展

会期 9月2日(水)から27日(日)まで
内容 当博物館の所蔵品による展示

☆企画展「夏休み子ども博物館」

会期 7月18日(土)から8月30日(日)まで
内容 小学生を対象に、縄文人の顔、大昔の人々の暮らし、見沼通船堀などをテーマにしたミニ展示。
7月24日(木)から28日(日) 昔のあそび
7月25日(土) 昔のおもちゃづくり

☆定例探鳥会〈毎月第3日曜日開催〉

(雨天中止)

会期 4月19日(日)・5月17日(日)・6月21日(日)
7月19日(日)・8月16日(日)・9月20日(日)
9時から12時(9時に当館集合)
参加費 小・中学生50円、高校生以上100円

日誌抄 (平成20年10月から平成21年3月まで)

10/1(水)・2(木) 展示替による休館(常設展→企画展)
10/3(金) 企画展「浦和博物館の35年」
10/19(日) 定例探鳥会
10/28(火) 北浦和小3年体験・川口飯仲小4年見学
10/29(水) 埼玉県博物館連絡協議会後期研究会(狭山市立博物館)
11/3(月) 団体見学1団体
11/7(金) 第2回さいたま市博物館協議会(市立博物館) 団体見学1団体
11/11(火)～13(木) 中学生職場体験(木崎中1年)
11/16(日) 定例探鳥会
11/21(金) 埼玉県博物館連絡協議会県外研修会(栃木県立美術館他)
11/29(土) 博物館見学実習(埼玉大学生)
12/7(日) 文化講座「100年前の浦和とその周辺」・企画展終了
12/8(月)～12(金) 展示替による休館(企画展→企画展)
12/13(土) 企画展「ちょっと昔のくらしの道具展」開催
12/21(日) 定例探鳥会

平成21年

1/10(土)～12(月) 昔のあそび(体験教室)
1/12(月) おもちゃ作り(体験教室)
1/15(木) 団体見学1団体
1/18(日) 定例探鳥会
1/20(火)～22(木) 中学生職場体験(三室中1年)
1/21(水)～23(金) 中学生職場体験(美園中1年)
2/15(日) 定例探鳥会
2/24(火) 埼玉県博物館連絡協議会資料取扱講習会(埼玉県立歴史と民俗の博物館)
2/25(水) 浦和ルーテル小3年体験
3/4(水) 埼玉県博物館連絡協議会南部地区館園長会議(埼玉県立文書館)
3/15(日) 定例探鳥会 団体見学1団体
3/18(水) 第3回さいたま市博物館協議会(市立博物館)
3/20(金)～22(日) 昔のあそび(体験教室)

さいたま市立浦和博物館館報 あかんさす No.97
編集・発行 さいたま市立浦和博物館
〒336-0911 さいたま市緑区三室2458番地
TEL・FAX 048-874-3960
発行日 平成21年3月31日
ホームページ <http://www.city.saitama.jp>
E-mail urawa-museum@city.saitama.lg.jp

